

「やあ、お久しぶりですな」

レジの机の上に散らばった伝票やチラシの束から目をあげて、イワさんはそう言った。

平日の昼すぎのことで、田辺書店のなかには、片手で数えることのできる程度のお客しか入っていないかった。半分開けた入り口の引き戸の向こうでは、満開になったツツジの植え込みが、五月の風に吹かれている。埃つぼく強い風にあおられて、ときおり、軒に下がった幌のはためく音が聞こえていた。

「こんにちは」

レジの前にすわりと立った、若い娘がそう言った。口元にかすかに笑みを浮かべ、白いブラウスの胸元に、一冊の単行本を、大事そうに抱きしめている。

彼女がすぐ傍らに近づいてくるまで、イワさんはそれと気づかなかった。それだから、居眠りをしているところを先生に発見された生徒のように、ちよつとばかりバツの悪い思いを

した。

「今日は静かですね」若い娘は、店内を見回すそぶりをしてから、そう言った。

「平日ですからな」イワさんは笑い、すぐそばのストールを引き寄せて、彼女に勧めた。

「お勤めのほうは——」いいかけて、イワさんは、今日が木曜日であることを思い出した。

そして、娘の勤めているデパートの定休日であるということも。

「そうなんです」娘は、イワさんの頭のなかの考えを読んだかのように微笑して、言った。

「立ち仕事にもやつと慣れてきましたけど、やっぱり、お休みがくるとほつとします。ついつい、寝坊しちゃって」

「就職して、やつと一ヶ月ですからなあ」

娘はストールにするりと腰かけ、抱きしめていた単行本を、膝の上にのせた。明るい水色のヘアバンドでまとめた髪が、肩のうえにはらりとこぼれた。

「それで、今日はまた？」イワさんは、机の引き出しから仕入帳を取り出しながら、娘のほの白い顔を見あげた。「こちらでお手伝いできるようなことができましたかな？」

若い娘は、淡いピンクの口紅をひたくちびるをちよつと噛みしめ、視線を落とした。膝の本にのせた手が、それが間違いないところにあることを確かめようとするかのように、表紙のうえで、ちよつと強ばつたように見えた。

「実は——今日は、父の古本のことでお邪魔したんではないんです」

「ほほお」

「いえ、大きな意味で言えば同じことなんですけど、ちよつとこみいったお話で」

娘の思案気なまなざしが、つと周囲に向けられた。イワさんは、すぐにそれと察した。

「あと十分もすれば、昼飯を食いにいっているアルバイトのあんちゃんに戻ってきます。そうしたら、コーヒーでも飲みにいきましょう」

ほつとしたように、娘はうなずいた。膝のうえの本を、また抱きしめる。その仕草が気になって、イワさんは、娘のすんなりした指のあいだからのぞいている、その題名をちらと読んだ。

『淋しい狩人』

著者は、安達和郎^{あだちかずお}。つまりは、娘の父親の書いた本であった。

彼女の名は安達明子。来月で二十一歳になる。イワさんと彼女との付き合いは、明子が短大の一年生のころに始まった。彼女が、電話帳を頼りに、家からいちばん近く、なおかつ「電話をしてみても、対応が親切そうな感じだったお店」を探して、古本屋田辺書店にたどりついたときに。

彼女が古本屋を探していたのは、父親の蔵書を整理するためだった。

「図書館や出版社にまるごと寄贈することも考えないではないんですけど、わたしと母とは、目録ひとつ満足につくることができないんです。そんな状態で、やみくもに寄贈しても、先方でも処分困るようなものも交じっているかもしれないし……それで、プロの方に手伝っていただけないかと思って。なにしろ、書庫いっぱいにあるものですから」

最初にこの申し出があったときには、イワさんは、ごく軽い気持ちで、「よろしいですよ」と請け合った。だが、田辺書店から車で五分ほどのところにある、二階建てのこぢんまりした木造家屋の、その「書庫」をのぞいてみたときに、そんな気軽な思いはふっ飛んでしまった。

「お父上の蔵書だとおっしゃいましたな、お嬢さん」

「はこ」

「お差し支えなければ、お父上がどういってお仕事をなすっていたのか教えていただけませんか」

明子は、ちらとほほえんだ。「父は、作家でした」

明子の父安達和郎は、昭和三十年代から五十年代にかけて活躍した、推理小説作家であった。一種独特の耽美的な作風で、あまり俗受けはしなかったものの、一部に根強い愛好者を持ち、松本清張を旗手とするリアルな社会派推理小説の奔流のなかで、「最後の探偵小説作家」とまで呼ばれていたことがある。

イワさんは、あいにく、明子と面識ができるまでは、彼の諸作を手を取ったことがなかつ

た。彼女と知り合つてのち、いくつかの作品のページを繰つてみたが——むろん、すべて絶版になつていたので、安達家から借りて読んだのだが——素直に感想をのべれば、あまり面白いとは思わなかつた。

そのことは、無論、明子にも、彼女の母親にも口に出して言うことのできるはずもなかつたが、イワさんが蔵書の目録づくりを指導しに安達家に通うようになって間もなく、明子のほうから、こんなふうと言つた。

「父の小説は、母やわたしには、あまり面白く感じられないんです。すごいなあとは思いますが。きつと、一般の読者にも、そんなふうを受け取られたんでしょね」

イワさんは、すぐにはなんとも言ひようがなくて黙つていたのだが、古風な縁の老眼鏡をかけ、昔夫が執筆の際に使つていたというモンブランの万年筆で、丹念にリストを書き綴りながら、彼女の母親が、

「お父さんの書くものを、全部面白いと思わないとならなかつたなら、母さんはとつくの昔に家を出ていましたよ」と言つたときには、思わず吹き出してしまった。

「そうかもしれませんなあ」

「そうですよ」と、明子の母は、穏やかな笑みを浮かべて言つたものだ。「お父さんの書くものが良からうが悪からうが、わたしはかまわなかつたんですよ。理解できなくてもよかつたんです。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。